



辻

Michi

毒結五十年

私は十八歳の時肋膜炎ろくまくえんを患わづらったが、そのときは、横腹せんこうを穿孔せんこうして、二百グラムほど水を除とった。ところがその際の消毒薬と、そうしていったん治なってから、一年後再発したときの服薬と都合二回の薬毒やくどくが、ちょうど背中と腋わきの下の間くらいの所に固かまっていたのを近頃発見したので、溶とかしてしまおうと思い自分で浄霊じようれいをしたところ、初めはずいぶん固かかったが少しずつ溶けてだんだん軟やわらかくなり溶けるたびごとに必ず下痢げりする。大して痛みはないが判おで擦おしたように正確せうさなのだから面白い。これによってみても、毒結どくけつなるものは何年たっても消えないことが分かる。私は今年満六十八歳だから、ちょうど五十年間出ずに固かまっていたわけである。だから浄霊を知らなかったとしたら、まさに一生涯帰きらないお客様というわけなのだ。

右のごとく、毒結が溶けて下痢になって出るほど気分がよくなる。いままで長い間気がつかなかったが、普通の気持ちと思っていた。それは、今度気がついてみると、思いもよらない爽快そうかい感が湧わいたということだ

実に嬉しい。まずこれで二、三十年は寿命じゆみやうが延びるような気がする。オマケに頭も非常に具合がよくなり、原稿もいままでよりよく書けるようになった。

これによってみても、薬毒なるものは、浄霊を知らないと一生涯消えないということが判わかるのである。それから下痢の原因の個所は私が常つねにいうごとく、ほとんど頭と背中である。それでその部の毒結が溶けて、いったん腹に集まり下痢する場合と、飲食物の中毒による場合と両方がある。とくに頭の浄化じようかによる場合は血液が多く出る、その際肛門から出るのを痔出血じしゅつけつと言いい、それが腹の方へいったん滞留たいりゅうしてから出るのが赤痢せきである。それでその毒血どくけつを早く出るよう自然の役目をするのが赤痢菌であるから、赤痢に罹かった場合放っておけば順調に毒血が出て治るのである。ところがそれを知らない医学は、あの手この手で出さないようにするため悪化するのだから、この理を医学が知ったとしたら人間はいかに助かるだろうかと思うと、私は残念たで堪たらないのである。

葛飾北斎(1760～1849年)は、『北斎漫画』や「富嶽三十六景」などの版本・版画の大作で知られていますが、肉筆の優作も数多く残しています。北斎は、安永7(1778)年数え年19歳で肉筆画の名手勝川春章(しゅんしょう)の門に入り、浮世絵を学ぶ一方、狩野(かのう)派・琳派・住吉派などの画法を学びました。本図は、北斎の美人画の中でも、人物の細面で柔和な表情と流暢で無駄のない描線、落ち着いた色彩などから見て、北斎画歴前半期の代表的な美人画といえることができます。



重文 二美人図
葛飾北斎
江戸時代(19世紀)
MOA美術館所蔵

《目次》

み教え	2
代表挨拶	4
信徒の声	12
【公告】宗教法人設立に向けて	13
感謝奉告 田川布教所 TK	14
【聖地・聖蹟シリーズ】みあとしのびて	16
地上天国祭(箱根)	20
地上天国祭(熱海)	21
七月度ご面会(箱根)	22
七月度月次祭(熱海)	23
聖地NOW	24
祖霊大祭ご案内	27
シリーズ明主様(41)	28
連載『神と繋がる明主様の食事観』(7)	32
お知らせ	34

《令和8年 信仰課題》

魂磨き^{たまみが}

心清めて世を救ふ

尊き神業^{みわざ}に励しめ^{いそ}よ皆^{みな}

【実践の誓い】

- 1 み教え拝読をさせていただきます。
- 2 参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- 3 明主様の救いを拡げていきます。

代表挨拶

立石 博

梅雨に濡れた木々の緑が、よりいっそう色濃くなってきました。

白雨^{しらさめ}に庭洗^{にわあら}はれてすがすがし

飛石^{こけい}の苔陽^ひに青く映^はゆ

(昭和8年7月20日『山と水』より)

昭和六年六月一五日「夜昼転換」の天啓をお受けになり、大本教に身を置かれながら、来たる立教に向けて、さまざまな困難と立ち向かいながら、日々をお過ごしになられていらつしやった明主様。しばしの休息で、この季節ならではの情景を鮮やかにお詠みになられたのでしょうか。明主様のご心中がしのべれます。

六月一五日、一六日、箱根神仙郷・熱海瑞雲郷(一五日のみ)

にて「地上天国祭」が厳かに斎行されました。私も一五日の熱海参拝に続いて一六日には西村相談役とともに箱根参拝をさせていただきました。完成間近の光明会館、奥津城、紫微宮参拝の後、新旧代表揃って「東方之光」執行部の先生方に挨拶をさせていただきました。

さて、先般京都平安郷で行われた「明主様と聖地に直結する会全国信徒集会」で、今後の会の方向性について、皆さまから、さまざまな貴重なご意見をいただきました(12頁にダイジェスト版、詳細版は別冊参照)。また、この集会前後にいただいたご意見も併せ、取りまとめた報告に基づいて、六月一四日、当会の総合役員会にて検討いたしました。その結果、「聖地直結の会」は今後、法人格取得に向けて準備を進めていくことを決定するに至りました。また、それに伴い、令和二年に設立した「宗教法人設立発起人会」を解散し、改めて、特別委員会「宗教法人 世界救世教明主様と聖地に直結する会・設立準備委員会」を設置しました。当委員会の詳細につ

いては、次号でお知らせする予定です。

組織形態を整えていくことは和解合意を受けて、必須の要件ですが、四月号挨拶冒頭で述べましたように、「包括法人世界救世教の発展に寄与できる会に成長することを目指してまいりたい」との大きな願いを抱いています。それはとりもなおさず、私たち「聖地直結の会」が、明主様のご理想実現にお役に立つ集団として成長していくことが、何よりも大切なことです。つまり布教発展を実現していくことですね。大きな教団の傘下に入る道を選ばず、聖地直結の会の八年間の歩みを基本に、主体性を確保しつつ、明主様を見つめ真つ直ぐに歩んでいく——これは、一番厳しい道を選択することになったかもしれません。しかし、私は大いなる希望をもっています。それは、私たちは発足以来、厳しい状況の中にあっても成長・発展をお許しいただいてきたからにほかなりません。これからも皆さまとともに、明るく楽しく心裕かに歩んでまいります。どうかよろしくお願い申し上げます。

布教発展の主軸は、何と言っても浄霊による奇蹟です。過去の教団の発展も、先達や信徒の燃えるような情熱による浄霊実践の積み重ねの上に成し遂げられてまいりました。今を生きる私たちにも、同じように求められているように感じます。浄霊は、私たちの日常生活に溶け込んでいます。そして、「おひかり」をかければ、いつでもどこでも実践できます。そのあまりの利便性ゆえに、浄霊の取り組みがマンネリ化してい

ないか、家族や信徒間の内向きにかたよった浄霊になってないか、今こそ見つめなおす必要を、私自身も強く感じています。今月号では『実践の誓い』2参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。——の浄霊について明主様のお言葉・お姿を通して、基本に立ち返る気持ちで学んでいきたいと思っています。

浄霊法の発見・原点

◎浄霊は昼の世界における核心的のものである

「私の治病法発見の根本動機としては、夜の世界が昼の世界に転換せんとする事を知り得た事と、昼の世界は火素の分子が増量するので、その火素を人体に集中透過さすに於て、強力なる治病光線が生れ、患部に放射せしむるに於て偉大なる治病効果を現わすという事の二つに外ならないのである。」

（「靈的医術」明日の医術 第三篇）

「いまはいかなる時かは詳細説いたごとく、私の唱える夜昼転換期てんかんのそれであり、全世界はいま正に新時代ましに向かつて一大飛躍せんとしつつあり、いま人類は野蛮やばんの衣をカナグリ捨て、高度の文化人たる域に達せんとしつつあることである。ここにはじめて戦争も病氣も貧乏も終焉しゅうえんを告げるのである。勿論浄霊法もうろんじょうれいの出現はそのための先駆であり、核心的のものである。」

（「靈層界」天国の礎・宗教下293頁）

◎浄霊は審判を切り抜け得る資格者をつくる

「本教の出現であるが、以上説いたごとく、審判を無事に切り抜けうる人間を、一人でも多く作るのが目的で、これが神の大愛であり、私に課せられた大使命でもある。その唯一の方法としての浄霊であるから、浄霊とは独り病気を治すのみではない。来るべき審判を無事に切り抜けうる資格者を作るのである」

（最後の審判とは」天国の礎・宗教上120頁）

浄霊の救いのみ業は「夜昼転換」という未曾有の歴史的な大転換に際し、明主様によって生み出されたものであることが、分かせていただけますね。

また、「景仰」の中に、石油資源開発株式会社社長の三村起一氏が一文を寄せておられます。

簡単の中に無限のもの

「私が初めて明主様にお目にかかったのは、昭和十九年の夏、箱根の神山荘でした。お昼ご飯をごちそうになって、昼寝しなさいとか、風呂にはいりなさいと言われました。それで、風呂にはいって、ゆっくり休ませていただきました。

ところが、帰りの電車の中で、私は下痢を催し、小田原駅の便所にかけてこんなことを覚えています。どうしてこんな下

痢がおこったのかと思いましたが、あとで聞くと、明主様にお目にかかったあとで、よく人は下痢をおこすのだそうです。とにかく、えらい下痢でした。つまりは浄化作用なのだ、これもあとでわかったことですが、そのときは、おながが悪くもなんともなかったのに、どうしてこんなひどい下痢をしたのかと不思議に思いました。（中略）

東山荘のある日、私は、夜昼転換、火素増量のお話の奥には、深い意味があるとは考えながらもよくわからないので、このことをおたずねしますと、明主様は、『浄霊をしつかりやって、霊を浄めればよくわかるよ』とおっしゃいました。

また、『真理は簡単の中に無限のものがあるので、むずかしく言うのはいけない。教義は簡単でいい。それを研究すればわかる。無心に、何も考えずに手をかざせばよい』と、それを考えながら説かれるのではなく、高く深く偉大なインスピレーションから、自然に出る燃えるようなお言葉に、私は強い感銘を受けました。（後略）

（景仰」232頁）

夜昼転換、火素増量の質問に対して、明主様は、『浄霊をしつかりやって、霊を浄めればよくわかるよ』と仰せです。明主様のお答えは単純明快ですね。

浄霊に込められた明主様のみ心・お姿

浄霊法の発見以来、大本時代より最晩年に至るまで明主様

の人類救済の根幹は、浄霊のみ業でした。その時々、社会情勢に応じて、宗教色を抜き、療術行為や指圧行為に改められた時期もありましたが、臨機応変に対応され、さまざまな変遷を経て、今があるのですね。

『人が病気で苦しんでいるのを見ると、居ても立ってもおれない気がして、どうしても治してやりたいと思い、浄霊をしてやると、治って喜ぶ。それをみると、それが私に写って嬉しくなる。』
（「感じの良い人」天国の礎・宗教下169頁）

病きに悩める人びとと見るなべに

胸の血潮は燃え沸るなり

この病院の患者残らず治したしと

思ひつ長き廊下をゆくも

御神業いよいよ忙しく身も魂も

へとへとになり疲れ果てけり

明主様もご神業草創期は、御自ら浄霊布教に歩かれました。明主様の「何としてでも苦しむ人々を救いたい」との強烈な思いが伝わってくるお歌ですね。

「景仰」には、大本教の大国以都雄氏が、大本時代のエピソード

ドを寄せられています。

いま苦しんでいる人を

「岡田さんが、大本に入信されたころ、大本では、文芸活動に力を入れておりました、明光社という文芸活動の独立機関を持つておりました。私は明光社の社長をしておりましたが、（中略）初めは、あまりお話をしなかったんですが、なかなかおもしろい方、いや、おもしろいというより、ちょっと変わった方でしたので、そのうちにお親しくさせていただいて、よくお話をするようになりました。（中略）」

聖師様とも性格的にも似たところがあって、聖師様も、「岡田さん、岡田さん」と言って、特別に目をかけておられたようでした。

岡田さんは、東京で布教されておられたんですが、そのころの大本で、一番力を入れておりましたことは、昭和神聖運動という一種の思想改革運動でありまして、私はそれの方の責任者でもありましたから、上京いたしますと、地方幹部の方々が、一堂に集まって来ては、その作戦を練っていたわけですが、岡田さんは、そういう運動には全然無関心のように、もっぱら病氣治しの方に興味をもっておられたのです。

ですから、私に対しても、『このごろ、御手代で病氣治しをやっているが、とてもよく治る』とお取次の話ばかりして来られるのです。それで私も「それは結構だが、しかし、病

気治しばかりやってもらっては困る。思想運動の方にも力を入れてほしい」と言ったのですが、『それはわかっていて。しかし、あちらからも、こちらからも頼まれて、運動どころではない』と言われて、実際、私もその点非常に困ったものでした。東京在住の他の幹部からは、『岡田さんは、お取次ばかりに夢中になっているから、あなたから忠告してほしい』と言われてもおりまして、そのつど岡田さんにお話したわけですが、岡田さんは、『これで人を救うことも大事中の大事ではないか。運動をやっても人々を直接救えるものではない。いま苦しんでいる人をほっておくわけにはいかないではないか』という持論でした。

また、岡田さんの病気治しは、実際よく治ったものです。われわれがやっても、それほど効果がなかったのに、あの人がやると、ほんとうによく治りました。それも、結局は、あの人の病人に対する親切と熱意、研究熱心の賜物と私は思います。さきほど私は、岡田さんは、凝り性だったと申しましたが、その裏には、そういうものが裏打ちされていたのです。〔景仰〕¹⁰⁸頁

当時の大本教は飛ぶ鳥を落とす勢いで教線を拡大していました。明主様は、すぐに頭角を現され、東京大森の支部長を務めておられました。日本が徐々に戦争への足音を響かせる中、大本は思想改革運動に力を入れていきますが、明主様は、心霊研究の研鑽に没頭され、人救いの道一筋に精進されました。大きな組織の方針に従わず、独自の道を歩む明主様に反

逆者のレッテルが貼られたのです。

そのような中でも、当時、日本宗教界の巨人とも言われた大本教のトップ出口王仁三郎聖師だけは、明主様の類まれなる霊力を見抜き、特別扱いをされていたようです。

浄霊力を強化するには

この浄霊はお光をかければ誰でも修行することなく神の光を取り次げる非常に普遍的な要素と、人によって霊力の強弱があるというどこまでも深い要素があるように思います。

◎力を抜くこと

「浄霊の一番の修行というのは、力を抜く修行ですよ。力を抜いてその霊が向こうに通らなければならない。だから本当いうと難しいんです。やり方は楽なんです。だから楽で難しいと、こう思わなければならない。通そうとすると力が入るんですね。そうでなく力を抜いて霊を向こうに通す。これをやると非常に良く治る。とにかく力が入っちゃいけない。もし治りが悪いと、力が入ったなと気がつかなければならない。私が始終そうです。私が、ちよつとだれか浄霊してやる場合に、力を抜くと非常に良く治る。おかしいなと思うと、知らず知らず力が入っている。ですから力を抜く修行ですね。それができるに従って良く治ると、こういうふうに思っていますね。」

（昭和27年5月15日）

◎神様のお道具という想念

「それから一つ注意しておくことは、慢心すると霊力はずつと少なくなります。だから信仰にはいりたてで、「自分なんか、そんな、できやしない」とビクビクしているときには割に治るのです。「もうオレはできてきた」と思うようになると治りません。それはなぜかという我慢心だからです。だからオツカナビクリの気持ちでやると治るのです。そうかといってビクビクしてやるのがよいわけではないので、つまり大いに神様の道具にならせていただいたという謙遜です。気持ちは、相手の病人は虫ケラほどでもないが、ごくつまらない人だというように思わなくてはならないのです。これは偉い人だと思うと、こつちの霊力が負けてしまいます。救世教は他の宗教から見るとまるで桁が違っているのです。その力をいただいているとしたら、世の中の人間は虫ケラのようなものです。しかしそれを出してはいけません。こつちは大いに謙遜しているのです。そこが難しいといえど難しいです。」（昭和28年7月1日）

◎誠が強いほど霊力が強い

「どうしたって誠の多い人ですよ。本当に気の毒でたまらないから治してあげようって人は治りが一番いいですよ。この人を治したら金がうんと入るとか、出世するとか、勢力を得る

とかいう気持ちでやると、ちょっと治りがよさそうに見えても、結局はあまりよくないですね。やっぱり、その人の心通りになるんですからね。心が神様の御心に合っている人はなんと言っても御守護も強く、力もまた強いもんですよ。心持ちしだいで同じ霊線が来ても、その人の体を通るときに違ってきってしまうんです。きれいな水でも濁った所を通ればやっぱり濁ってしまうし、濁ってない所を通れば、どうしても水がきれいなものと同じでね。そんなもんですよ。」（昭和24年7月23日）

浄霊の多様性について

浄霊の在り方はあくまでも一対一の相互浄霊が基本になると思います。人が真摯に手をかざす姿は美しいものですね。場合によつては祭典や集会における資格者による集団浄霊や列浄霊がなされます。

昨今は、自己浄霊・想念浄霊・遠隔浄霊の取り組みが、よく聞かれるようになりました。コロナ禍の折に、思うように人が集まらない、浄化者の浄霊訪問に行けない状況が生まれ、社会常識を踏まえながら、一人一人が創意工夫をされてきたことと思います。感謝奉告でも自己浄霊・想念浄霊・遠隔浄霊の言葉がよく出てくるようになりました。私も現場にいますから、よく信者さんから、「想念浄霊・遠隔浄霊はどのようになれば良いのですか」と問われることがあります。

浄霊の在り方は、その時々々の執行部によって社会情勢など

を踏まえ、定められてきたと承知しています。今現在の段階でマニユアル的なものを提示することは難しいと思います。

しかし「悩み苦しむ人を何とかしてあげたい」という思いの具体的表れが浄霊ですから、祈り・光は、物理的な距離や空間を超えて届くと信じ、臨機応変に取り組むことが大事なのだと感じています。その取り組んだことをお互いに語り合い、学び合うことが大切なのではないでしょうか。

たとえば、私は県外出張の時、よく高速道路を利用しますが、たまに事故渋滞に遭遇します。そのような時は「明主様、今〇〇に向かっていますが、事故渋滞です。大難を小難に、また渋滞に巻き込まれている方々がイライラしないように遠隔浄霊をお許しください」と念じ、事故現場は見えませんが、遠隔浄霊をさせていただきます。すると、不思議なことに、当の本人が落ち着きます。

自分がどこにいても、何をしていてもご祈願の報告が入ります。手をかざせない状況であれば、明主様に想念浄霊のお許しをいただき、すぐに取り組むようにしています。

「景仰」の中に、想念の浄霊という、そのものずばりの文が載せられています。

想念の浄霊

「ある時、お勝手に料理をしておりました奉仕者が、急に胸が苦しくなって吐きそうになり、どうしても仕事が続けられ

ませんので、明主様は二階でお仕事中でしたが、ご浄霊をお願いにまいりました。

ちょうどその時、明主様はご推敲中でしたが、それをお聞きになられまして、『ああ、そうか。じゃ、そこにすわってらっしゃい』とおっしゃって、その人を部屋の隅にすわらされたそうです。そして十分ぐらいいましたら、明主様が、『もういいだろう。帰ってよろしい』と言われましたので、その人は「お仕事中だから、夜いただけるんだな」と考えながら引き下がったそうです。帰ってくるとみんなに、「あんた、顔色がずいぶんよくなっただじゃない。よかったわね」と言われるので、気がついてみると、ほんとうによくなっていたそうです。

そのことを夕方明主様に申し上げますと、明主様は、『お光が強くなったから、想念の浄霊で治るんだ』とおっしゃったそうですが、非常にお忙しい場合には、そういう形で、浄霊されたこともあったそうです。（管長）

（「景仰」425頁）

皆さまは、どのように受けとめられるでしょうか。「明主様は、特別のお方だから、私たちにはできない」と思うのか。「私も明主様に神倣って、場合によってはさせていただこう」と思うのか。もちろんそこに私たちの「樂をしよう」というような、横着な気持ちがあってはなりませんね。

自己浄霊については、巻頭のみ教え『毒血五十年』の中の明主様のお姿に学ぶことができます。

自己浄霊についてのお言葉

「自分は浄霊の力を戴いているのであるから、自分の病気で自分が治すのが本当である。考えてもみるがいい。人の病気を治す力を与えられている以上、自分の病気でも治らぬ筈はないので、この信念こそ肝心である。」
(昭和28年8月19日)

「これからは浄化を緩めるということは、だんだんできなくなりますから、今度は逆に、できるだけ浄化を促進させて積極的にきれいにするというほうがよいです。それでさっき言ったように肩を主にしてやるとともに、毎日浄霊してもよいのです。それから入信している者は、自分でも肩の浄霊をやるとよいです。できるだけそういうようにさせるようにしたほうがよいです。それで肩というのは非常に固いものですから、こっちで浄霊してやるよりか、本人が暇があれば始終やっているほうが効果があります。そういうようにしてやったほうがよいです。」
(昭和28年6月17日)

「自分で始終やると良いんです。やっているんでしょね。(中略)霊力が弱いというのは、力を入れるからで、ぜんぜん力を入れなければ非常に強くなる。そうなればどんどん溶ける。」
(昭和26年10月25日)

「痔でも尿道でも、自分で浄霊すると良いですよ。まだ、入

信して間もないが、そういうようにして根良くやってご覧なさい。自然に出るようになります。そうすると、楽しみになつて(中略)非常に希望が出ますよ。」
(昭和26年11月8日)

「押してみても、痛い所があったら……グリグリがあったら……そこを浄霊すれば良い。私も始終やってますが、五十年くらい前に肋膜炎をやつて、いまもやっていますが、だいぶ溶けてきて、非常に具合が良くなっている。」
(昭和26年11月15日)

「私は(中略)薬毒を知るまではほとんど薬づけといったような具合だからね。(中略)それで、始終自分で浄霊しているために、年々それが減つていくので、健康を増していくんですね。」
(昭和26年12月23日)

「すべて、痛むのは治りが良いんですからね。浄化が強いんだからね。むしろ、安心して……楽しみにして良い。自分でもやって良いですよ。できるだけ力を抜くんです。力が入ろうとするから、抜き抜きやる。ただ抜くだけではないけない。奥に(中略)通るようにする。(中略)力を抜いてする。一つの練習ですね。」
(昭和26年12月1日)

今月号は、何か勉強会の資料のような挨拶になりましたが、私たち聖地直結の会の発展や一人一人の信仰生活向上の一助となれば幸いです。

ありがとうございました。

二〇二六聖地直結の会のこれからについて・信徒の声

- ◆聖地直結の会が独自に活動していけるなら、現状維持を希望する。
- ◆未信徒の妻や子どもを、明主様にお導きできたら、と思っている。
- ◆活発な意見を期待して参拝したが、いまひとつだった。
- ◆神性人間に近づく努力をしたい。
- ◆各グループの発表を聞いた立石代表のお考えを聞きたい。
- ◆加古さんの発表に新しさを感じた。
- ◆明主様を身近に感じ、日々のご守護に感謝。今の状態でご用を継続し、向上させていただきたい。
- ◆明主様のみ心を、一人ひとりがしっかりと実行していきたい。
- ◆教団浄化の前のように一つの団体になるのが本来だと思う。
- ◆本場に明主様に添っていかけるか、問題は山積みです。
- ◆当会の将来については、独り立ちが許されたいと思う。
- ◆法人化するのには、まだ先のことはないか。
- ◆今後については、信徒の意見を聴きながら進めばいい。
- ◆明主様のみ教えに倣い、前向きに取り組んでいきたい。
- ◆明主様にお応えさせていただきたい。
- ◆信仰継承に不安を感じている。現状の中で精一杯取り組みたい。
- ◆三団体で一つのことに取り組み、それぞれの違いを認め合いながら、明主様に求める喜びを感じたい。
- ◆独自に布教活動を展開して行きたい。
- ◆執行部が方針を示せば、信徒の思いが定まると思う。
- ◆発展は難しい。多くは望めないと思う。
- ◆聖地直結の会があったから、路頭に迷うことがなかった。不安や葛藤の中で、各団体が少しずつ歩み寄れたのは奇蹟だ。
- ◆いづのめ教団と一緒に活動できたら自然で良い。

- ◆質問に対し、回答がその場で聞けなかったのは残念だった。後日、何らかの形で聞けることを願っている。
- ◆事前に知らされていた質疑応答に興味があったが、応答が少ないまま終了したのは残念だった。
- ◆西村相談役と立石代表のお話が長く、質疑応答の時間が短縮された。全国信徒の疑問や質問をもっと聞いていただきたい。
- ◆今回の信徒集会の目的が、執行部と信徒との質疑応答と聞いていたので、信徒とのやり取りにもっと時間をかけるべきだった。
- ◆質疑応答は全体的におとなしく、ハツラツさや意欲に欠け、心細さを感じた。
- ◆新代表に、信徒は何を望むのか、そうした声を聞く場がなかったことが残念だった。
- ◆質問には、後日ではなく、その場で回答してほしい。
- ◆それぞれの団体の良さを認め合い、無理に一つにならなくても良いという発表に共感した。
- ◆信仰後継者育成に成果が出ているところの話を聞きたかった。
- ◆今後の全国信徒集会では、後継者育成をテーマにしてはどうか。
- ◆助師資格者に、研修の場を開いてほしい。
- ◆マイクとスピーカーの操作に不慣れで質疑応答が聞きづらかった。
- ◆昨年に続き平安郷にご参拝ができたことに感謝。
- ◆団体の違いを超え、明主様のみ心になう交流を実現したい。
- ◆聖地直結の会として、箱根・熱海・京都の聖地に参拝の機会が増え感謝している。
- ◆三団体には、今までの歩みや大切にしているものに違いもあると感じている。よって、無理に一つにするより、違いを認め合いながら交流し、明主様中心に歩んでいきたい。
- ◆法人格も含め、聖地直結の会として活動を続けたい。

【公告一】「宗教法人設立発起人会」解散について

令和二年八月一日、「道」No.21において、「宗教法人設立に向けて」と題し、特別委員会を組織したことを発表。その後、諸般の状況から活動そのものが休眠状態になっていました。一昨年末、教団紛争の和解により、当会を取り巻く流動的環境も収束したことから、次なるステージに移行するため、去る六月一四日、当会の総合役員会において、特別委員会「宗教法人設立発起人会」を解散することを議決しましたので、茲にお知らせします。

【公告二】「宗教法人 世界救世教 明主様と聖地に直結する会」

設立準備委員会の設置について

総合役員会では、右公告一の議決を受けて、改めて当会の将来を見据え、宗教法人格取得を目指すことを決議しました。

設立目的は、「世界救世教祖岡田茂吉師（明主様）を仰ぎ、人類救済と真文明創造を提唱され、真善美完き恒久平和の理想世界である『地上天国建設』という目標を発せられた明主様の導きを受け、その負託に応えるため」であります。当会は、会員の皆さまの信仰を護り、さらなる信仰の高みを目指して、社会的責任を果たしてまいります。茲に宗教法人法第12条に基づき、右のとおり、公告いたします。

委員長 立石 博

名誉委員長 西村 正資

委員 今江 孝夫

門埜 敏春

吉原佳予子

和田 博

東本 昌也

木場 信幸

武田 安広

感謝奉告

お任せの中でいただいたご守護

田川布教所 TK

この度、平安郷一泊奉仕研修会に参加のお許しがいただけたことと、主人にいただいたご守護についてご報告させていただきます。

昨年、初めて平安郷参拝が許され、感動のあまり「来年も絶対参拝を許されたい」と思っていました。

ところが、三年前から肺に水が溜まる肺水腫を患っている主人が、今年になって、さらにパンパンに水が溜まるようになり、呼吸困難にもなるので、水抜きを繰り返すようになっていました。また、左の鼠蹊部にヘルニアが見つかり、痛みも頻繁に起こるため心配していました。

そのような中、平安郷参拝のご案内をいただきました。参拝したい気持ちはもちろんありましたが、もし主人をショートステイに預けている間に「何かあったらどうしよう」とか、「もし何かあったら参拝したことを後悔するのでは……」と思うと決心がつかず、平安郷参拝希望者の名簿になかなか記入ができませんでした。

その間、み教え拝読をしたり、お祈りする中、「どうにかなるのではないか。もう全部神様にお任せしよう」という気

持ちになり、参拝を決めました。するとなぜか不安は消えてしまいました。

五月一六日、平安郷研修センターに到着し、入所参拝を済ませ、岡田茂吉記念館を拝観させていただきました。その後、庭苑にて草取りのご奉仕をさせていただきました。さわやかな陽気の中、皆さんと気持ちの良い汗をかき、楽しくご奉仕することができました。草を一本一本抜きながら、「夫が元氣になりますように」とつぶやいていました。

そして、予定にはなかったのですが、急遽お抹茶の接待をいただくことができ、感動しました。

翌日、春秋庵で朝拝が許されました。昨年はガラス窓越しでの参拝でしたが、今回は室内に入れていただくことができ、興奮して心臓がバクバクしました。最初は部屋の後方に、Mさんと一緒に座っていたのですが、職員の方から「前の方へ」と促され、気付いたら大弥勒御尊像様の一番前にMさ



春秋庵にて職員の説明を聞く参加者

んと座っていました。自分から率先して前に行ったのではなく、今考えたらとても不思議なことでした。もう感動で言葉がありません。

春秋庵から眺める広沢の池の景観はともきれいで、明主様をとて身近に感じる事ができました。

また、いづのめ教団職員の方々の、奉仕者を温かくお迎えくださる姿勢には、感銘を受けました。言葉で表現するのは難しいですが、平安郷の光に満ちたすばらしい時間を皆さまとともに共感することができ、感謝の気持ちでいっぱいです。明主様が「聖地の土を踏むだけで良い」とおっしゃられた意味を改めて噛みしめることができました。

私が聖地平安郷に居る間、お蔭さまで主人は何事もなく無事に過ごせていました。本当にありがとうございます。

もう一つ、主人の病気について報告がございます。今回鼠蹊ヘルニアが左右に見つかり、左がかなり大きく、頻繁に痛



平安郷庭苑にて草取り奉仕

みがあります。鼠蹊ヘルニアは昔で言えば脱腸のことですね。

そのまま放置すると嵌頓かんどんという状態を引き起こすらしく、脱出した腸が戻らなくなつて、腸が壊死し、とても危険な状態になるそうです。そのため、手術をするしか方法はないようです。健康な人なら難しい手術ではないようですが、主人は血液をサラサラにする薬を服用していることと、人工呼吸器を付けての全身麻酔では、肺がまず耐えられないだろうとのことでした。そして、嚥下の状態が悪い中で、今後さらに嚥下機能が低下するため、全身麻酔はリスクがとても大きいということでした。よつて、全身麻酔ではなく、腰椎から麻酔することで、リスクを下げることに決まりました。ところが、三年前から圧迫骨折を繰り返し、背骨が曲がっているうえに、骨が何ヶ所も潰れているので「麻酔がかけられないかもしれない。その時は全身麻酔になる」ということでもありました。『もう神様にお任せ』と思い、子どもたちとも話し合い、手術に踏み切ることになりました。

五月二七日入院。六月三日に手術を受けましたが、お蔭さまで無事に終わることができ、術後の主人の体調は順調です。今回も大きなご守護を賜り新しい生命をいただけたと思います。平安郷での体験や学びをこれからの人生の柱として、主人と心をひとつに、さらなる感謝の心で、布教所のご用奉仕やみ教え拝読に取り組ませていただきます。

今回の主人の浄化で、多くの信徒の皆さまにご祈願いただきましたこと心より感謝申し上げます。

瑞雲郷 庭園（梅園・つつじ山）

瑞雲郷は、明主様が地上天国のひな型として建設された庭園です。昭和二〇年に現在の救世会館付近の土地を入手し、翌二一年から建設に着手されました。その後、つつじ山や梅園、石雲台周辺へと敷地が広げられ、当時は樹木が生い茂り細い野道しかなかった丘陵地が、多くの信徒の奉仕によって現在の姿へと整えられました。

標高約二〇〇メートルに位置する境内からは、相模灘、伊豆半島、遠く房総半島まで望むことができ、特に水晶殿のある場所は、明主様によって「景観台」と命名されました。その眺望について明主様は、「全く天地創造の時神が準備された聖地であり、神の大芸術品でなくて何であろう」と絶賛されました。

境内には、救世会館、水晶殿、つつじ山、梅園のほか、MOA美術館、稲妻階段などがあり、瑞雲郷を代表する景観を形作っています。

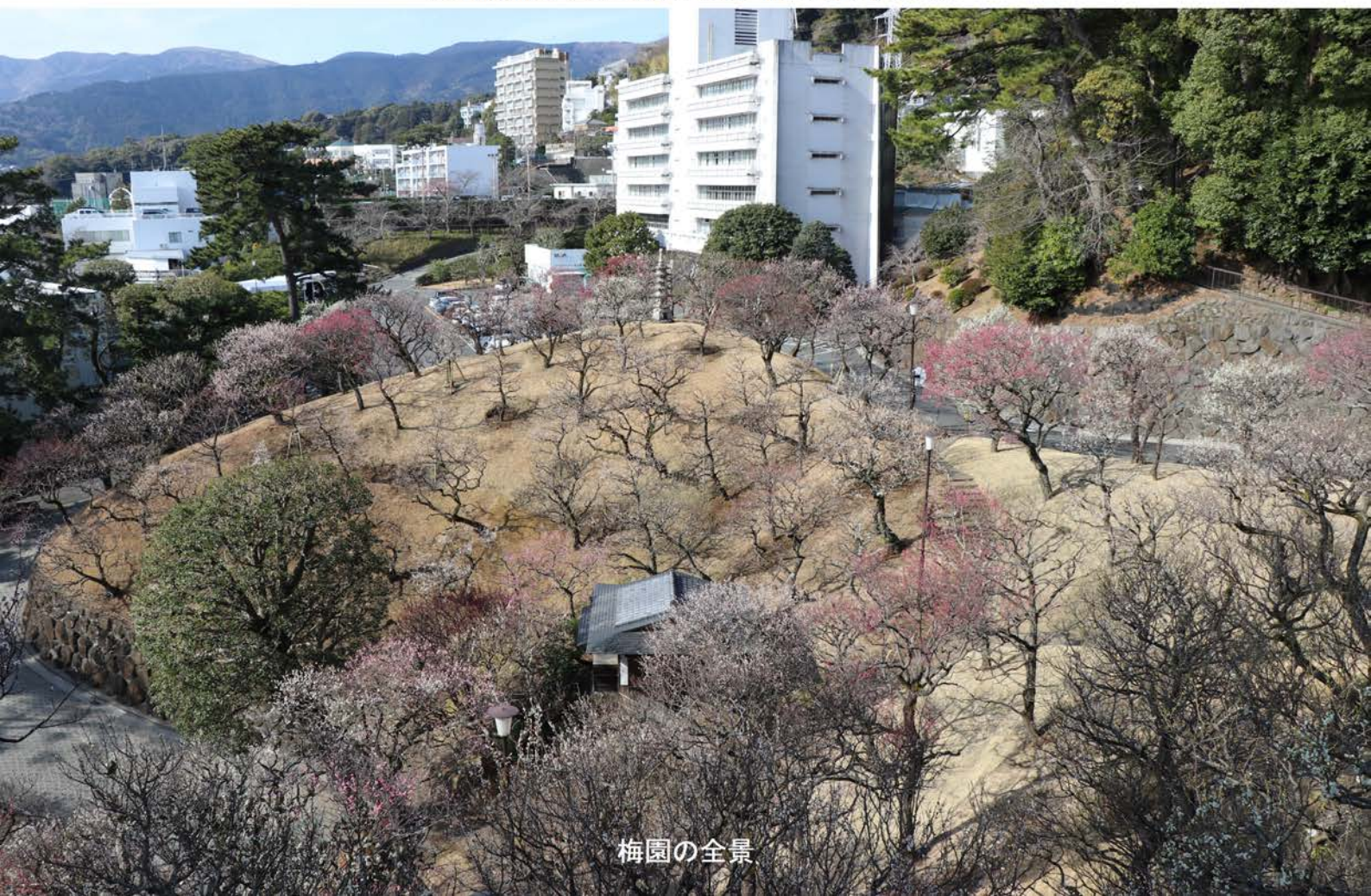
梅園は、明主様が愛された尾形光琳の「紅白梅図屏風」の世界を庭園として表現したもので、昭和二六年春に完成しました。小山が重なる起伏豊かな地形に、風雅な趣をもつ梅の古木約三六〇本が植えられています。

造営に先立ち梅の購入が始まると、明主様は「花梅は匂いが弱いから、実のなる木で古木を植えるように」とご指示され、樹木の吟味から根回し、運搬、植え込みまで約四年の歳月をかけて造営されました。



御造営奉仕記念
昭和二十六年六月二十日

1951 (昭和26) 年春に完成した梅園前での建設奉仕隊



梅園の全景



つつじ山は、救世会館の用地造成で出た土砂を運び、明主様の「どこから見ても丸く見えるように」とのご指示のもと築かれた築山^{つぎやま}です。造形には幾度も手直しが重ねられ、植えられたつつじを一度移植して築山を造り直すほど徹底したこだわりの末に完成しました。完成後、明主様は奉仕者や職人の労をねぎらわれるとともに、「みんなこの山を造るのに、日数や経費を心配したろうが、そんなことは問題ではない。私はほんとうに立派なものを造って後世に残したい。ただそれだけを考えているんだ」と仰せられました。

約三〇〇〇平方メートルの築山には、約四〇種類、約三八〇〇株のつつじが植えられ、四月下旬から赤、白、ピンクの花々が美しいモザイク模様を描きます。



1952(昭和27)年頃の景観台(つつじ山)



景観台から相模湾と熱海の市街を望む



「心身ともに健康な人づくり、まちづくり」の実現を誓った



着々と進む光明会館の建設



箱根美術館の改修工事も同時進行

「本当の真理」を世界へ

(箱根) 地上天国祭

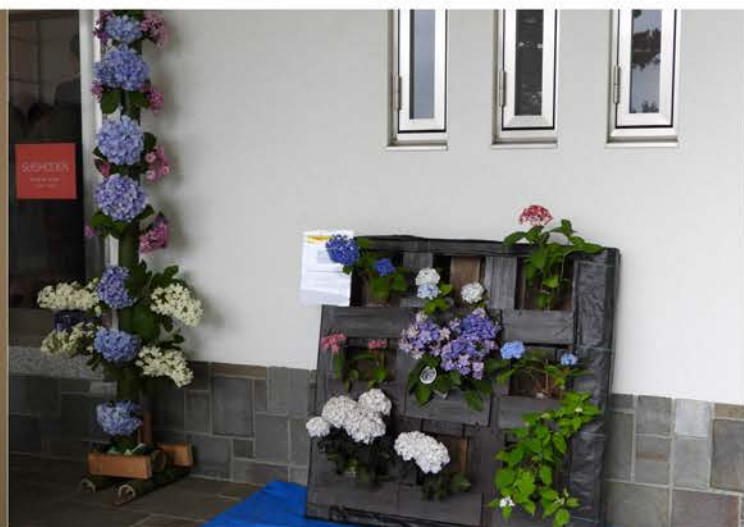
6月15日、光明神殿にて地上天国祭を斎行。中島MOA理事長は、節目となる地上天国祭を迎えられたことへの感謝を述べ、光明会館建設が総仕上げの段階に入ったことを報告。また、スローガン「心身ともに健康な人づくり、まちづくり」は、2040年問題など社会的課題への対応であると同時に、「個と家」の完成から新文明を築くご神業であると説明。さらに、三大事業や聖地建設の進展に触れ、「本当の真理」を広く伝え、「永遠のいのちを幸せに生きる人の輪を、さらに広げてまいりたい」と決意を述べた。



明主様のみ心を求め、地上天国建設のご神業にお使いいただくことを誓う



教祖記念室を拝観する参拝者



紫陽花を生けてお迎えする水晶殿

(熱海) 地上天国祭

地上天国建設への決意を新たに

6月15日、救世会館にて地上天国祭が執り行われた。杉原いづのめ教団理事長は、「地上天国祭は明主様が霊界の夜昼転換の天啓を受けられた意義深い日である」と述べ、「世界救世教とは何か」のみ教えを紐解きながら、地上天国建設と宗教文化創成のご経綸が実現の時を迎えていることを示した。そして、神様を信じ、感謝と利他愛をもって浄霊や日々の信仰実践に励み、み心を具体化することの大切さを強調した。また、「三聖地の整備や平安郷美術館建設、大弥勒御尊像の正式奉斎を通して、地上天国建設にお使いいただいてまいりましょう」と呼びかけた。



「個と家の完成」に決意を捧げた



箱根美術館本館（観山亭後ろ）の改修工事が進む

身近な実践から新しい文明へ

（箱根）7月度ご面会

7月1日、光明神殿にてご面会が執り行われた。中島MOA理事長は、先般の地上天国祭を通して「新しい医学」創成へのご経綸が新たな段階に入ったと述べた。また、会員による実践事例を紹介し、一人ひとりに寄り添い、食や芸術、浄化療法など岡田式健康法を日常生活に生かす実践を通して、地域に支え合いの輪が広がっていることを紹介。さらに、こうした身近な実践が「個と家の完成」から新しい文明の創造へとつながる歩みであるとし、光明会館建設とともに、明主様のご経綸に心を合わせて歩んでいきたいと述べた。



真の信仰者を目指し、日々の実践を誓う



水晶殿からの絶景を楽しむ拝観者



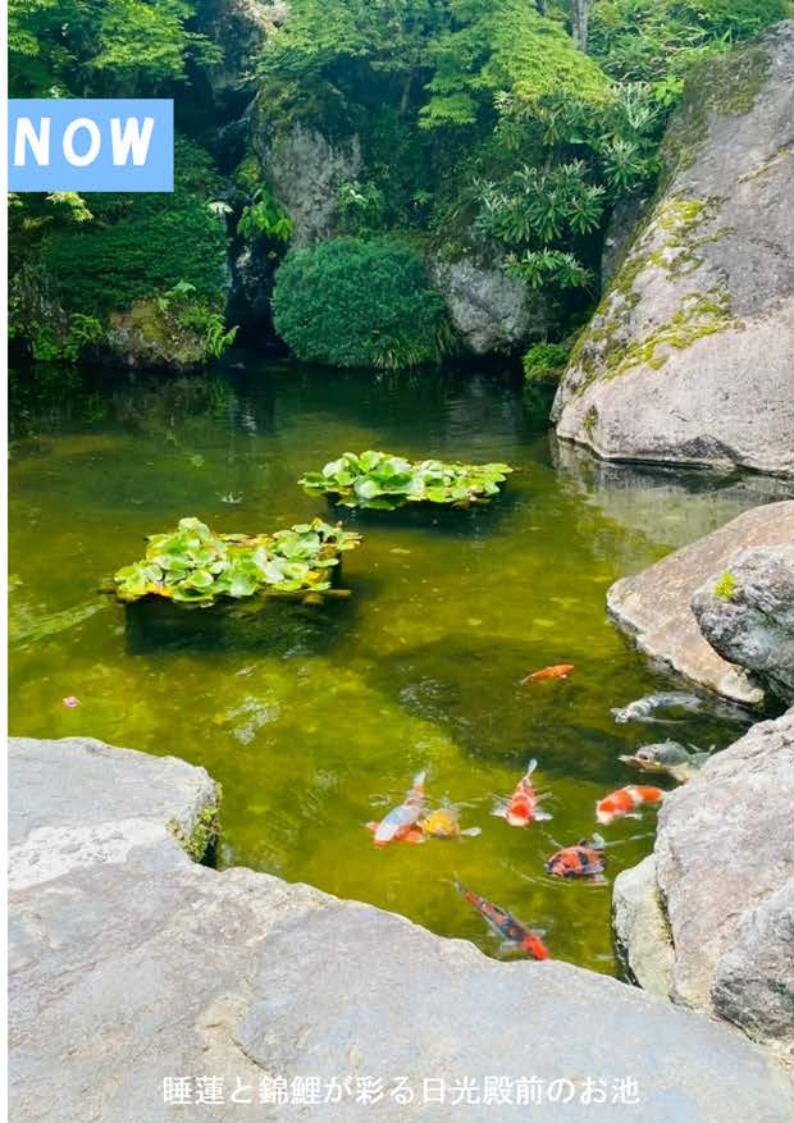
七夕飾りでお迎える水晶殿

(熱海)7月度月次祭

「常識」を身につける信仰

7月1日、救世会館にて月次祭が厳かに斎行された。杉原いづのめ教団理事長は、み教え「常識」を拝し、真の信仰とは神様のお働きを信じ、日々の生活の中で自然に信仰を実践し、周囲と調和しながら人格を高めていくことであると述べた。そして、感謝と謙虚さをもって人々の幸福を願い、浄霊や利他愛を実践することが、神様のみ心にお応えする歩みであると強調した。また、平安郷建設に込められた明主様のみ心を胸に、「神があること」が世の常識となる時代を目指し、周囲から信頼される真の信仰者として歩んでいきたいと呼びかけた。

NOW



睡蓮と錦鯉が彩る日光殿前のお池

神仙郷



日光殿芝庭から望む神山荘



明星ヶ岳を望む観山亭

瑞雲郷

聖地



紫陽花が涼を添える、救世神殿横のお池



清らかに咲くムクゲ



豊かに実る梅園の梅



気品ある純白のクチナシ



木陰にひっそりと咲くヤブミョウガ



木陰に咲くゴボウシ



平安郷

鏡池畔に群生するハンゲショウ



夏空に映える大楠と楠風荘



松と紫陽花が織りなす景観



8月1日 八月度月次祭・祖霊大祭ご案内

昭和20年8月15日に太平洋戦争が終結し、日本が戦争に負け世界平和がいかに大切かということを知られました。私たちは、そのことを決して忘れないためにも、平和の祈りを捧げていくことが大切です。

また、私たちはご先祖さまからの営みの流れのなかで、今という時代に生きています。祖霊さまは、たえず私たちを見守りながら、霊界でのご用に勤しまれています。子孫がそのことを実感し、日々祖霊さまに感謝と慰霊の祈りを捧げるとは、祖霊さまがたいへん喜ばれることでもあります。

祖霊大祭は、みろくおおみかみ様のみ前に、私たちに関わりのある祖霊さまをお招きし、大神様よりみ光をいただく祭典であります。

また、私たちも聖地に参拝して、祖霊さまとご一緒に感謝と喜びを、ともにさせていただきます。

※箱根聖地で執り行われる祖霊大祭は「光輪祭」と呼称し、同じく8月1日に開催されます。

立教のそなえ

「仮発会式」

昭和九年（一九三四年）十二月二三日、この日は皇太子・つぐのみやあきひとしんのう 継宮明仁親王の満一歳の誕生日というめでたい日であるが、また、教祖五二回目の誕生日であり、さらに、「大日本観音会」の仮発会式が応神堂において行なわれた記念の日でもある。

この日夕刻、立派に表装のできあがった教祖自筆の千手観音の床の間に奉斎されたのであった。その神々しくも慈悲にあふれた容貌ようぼうを拝し、参拝した三十余名の幹部一同は、身の引き締まる感動を覚え、おのずから襟えりを正したのであった。

定刻午後六時、仮発会式が始まり、献饌けんせんに続いて、教祖先達せんだつによって『天津祝詞』奏上、玉串奉奠ほうてんのあと、教祖新作の『善言讃詞』をこれまた初めて奏上、讃歌「東方光」を奉唱して、祭典は終了した。

*教祖がその心を歌に詠んだもので、祭典の時に奏上

東方光

ひさかた あまつ みかみ 久方の天津御神は東方の光となりて現れましにけり

東方の光といへど観音の救世ぐせの力の事にぞありける

三千年を待ちし甲斐かいあり東の光は今し昇らんとすも

瑞雲たなびの靨かく空に赫々と輝きいづる東方光かも

東方の光は東方日の本の国より出づる神定さだめなりけり

直会なおらいのあと、教祖は観音会が発会するまでの経緯を話し、ことに観世音菩薩の霊徳を示す三葉の靈写真さんようが生まれたいきさつを物語った。それから中島一斎の妻・暉世子きせこの、生田流いくた箏曲「御国の誉ほまれ」の演奏の奉納があつて、発会式は滞りなく終了したのである。教祖の話に、立教の喜びと、今後の神業への献身けんしんの誓いを新たにした参会者の心には、澄すみきつた琴の音が、ひときわすがすがしく響いたのであった。

この日、式典が終了してからのことである。新来の婦人が一厘銭いちりんせんを持参して教祖に献上した。ところが、その一厘銭には、表に千手観音の浮き彫りがあり、裏には千手観音の四文字が現われていた。教祖はさっそく、三、四〇年も古銭を扱っている道具屋に見せたところ、

「初めて見るものです。」

と言う。よほど珍しいものであったようである。これについて教祖は、



仮発会式後、教祖を中心に撮った記念写真。右手奥に千手観音像が見える

「千手観音様は一厘の働きであるといふ事を、神様が小さな事に依^よって、知らされたのだと思ひます。」

と述べている。

教祖は未完成、不完全の働きを九分九厘の働き、完全の働きを十全^{じゅうぜん}の働きと表現することがよくあった。そうして、その差である「一厘の働き」の中にこそ、ものを完成させていく絶対の力が込められていると説いたのであった。

応神堂において仮発会式をあげた夜のことである。

「半蔵門の御神前を仮本部として発会式をあげよ。」

という神示があった。半蔵門は九月まで大本、麴町分所として使っていた建物である。さっそく教祖は翌日改めて現場を見て、祭壇など造作^{ぞうさく}についての指示をした。年末の忙しい時期ではあったが、工事は順調に進み、松飾りも立派にできあがって、あとは発会式を待つばかりとなったのである。

「大日本観音会」の役員はつぎの通り決定し、機関紙『東方の光』第一号に発表された。

教祖は、昭和九年（一九三四年）以降、それまでの「暉月」の号をやめ、浄霊、医療関係の文には「仁斎^{じんさい}」、書画の揮毫には「自観^{じかん}」の号をおもに使うようになり、また、信者たちはそれまで教祖を「先生」と呼んでいたのを「大先生」と呼称^{しょう}するようになった。「大日本観音会」の発会時における組織は左のごとくである。

盟主(会主)
会長
次長兼会計
理事長
理事

岡田 仁齋	竹村 良三	正木 光雄	中島 一斎	中野 操	堀口 清松	荒屋 乙松	松久 茂徳	清水 義仁	金高 公義	金高 真城	木原 義彦	岡庭 真次郎
								(清太郎)				

草創期の先達

昭和一〇年(一九三五年)元旦の、「大日本観音会」の発会
は、教団の原点とされている大きな節である。ここにいたる
までの昭和の最初の九年は、神業の草創期であり、後の教団
の基礎が固められた大切な時であった。このころは、もちろ
ん、施設その他、今日見るような立派なものは何一つなく、教
祖の生活も、物心両面にわたって不自由の多い時代であった。
しかし、そのような中を、ひたすらに神を信じ、教祖に誠を尽
くして、神業を支えてきた何人かの先達の人々があつた。

草創期の先達の中でも、もつとも早くから教祖の側近に奉
仕して執事の業務を担当し、昇天後まで変わることなく誠を
捧げた井上茂登吉(本名、福夫)は、明治四十一年(一九〇八年)
八月、島根県松江に生まれた。生家は宍道湖畔で茶を商う由
緒ある家で、熱心な大本の信者でもあつた。井上は幼時から
宗教的雰囲気の中で成人している。大学受験のため昭和二年
(一九二七年)三月、上京してすぐに半蔵門に近い愛心会本
部へ行つた。ここは後の、麴町分所で、教祖の麴町方面の布教
の中心となつた所である。井上はここで、教祖に初めて会い、
「いつでも遊びに來なさい。」

と言葉をかけられて、冒し難い無形の力を感じ、ただただ、
どぎまぎするばかりであつたと、後になって回想している。

井上が初めて大森の教祖宅へ行つたのは、上京した翌年、
昭和三年(一九二八年)の十一月のことである。出口王仁三
郎が東北巡遊の途上、大森へ立ち寄つたので、東京中の大本
の信者が集まつた。そのおり、井上は初めて行つた教祖宅の
気兼ねのない、なごやかな雰囲気、心温まるものを覚えると同
時に、教祖の図抜けた人物の大きさ、心配りの隙のなさに限
りない魅力を感じたのである。

その日、集まつていた信者の一人が、教祖に信仰上の質問
をした。

すると教祖が、

「慢心はいけませんが、慢心を通り越した慢心ならいいですよ。」

と答えたので、相手は驚いて納得のいかない顔をしていた。それを聞いた井上も非常に驚いた。というのは大本では慢心はもつとも恐るべき落とし穴として強く戒めていたからである。しかし、井上は驚きながらも、そこに慢心を懸念する凡俗の境を通り越した、非凡の境地をおぼろげながら、感じ取ったのであった。

井上は、生来の病弱から暗い精神生活を送っていたが、教祖との出会いによって、それまでの人生観は大きく変わった。教祖のまわりには、常に明るい天国的な雰囲気があり、また、教祖の話には、宗教家にありがちな持つて回った大仰な調子や、お説教的な固苦しさはまったくなかった。きわめて常識的で穏やかな、淡々としたものであった。とくに驚いたことは、どのような質問に対しても当意即妙に答える、その智慧の深さであった。

ある日のこと、教祖が大井支部で講話をした時の話である。
「大和魂とはなんでしょうか。」

という質問が出た。時あたかも国際情勢は年ごとに緊張の度を加え、日本は世界の中に孤立して難局に直面していたころであった。大和魂という言葉も、しばしば人の口の端にのぼっていた。教祖は、

「大和魂とは松の心である。松の心とは時節を待つ心であり、いつまでも変わらぬ誠である。」

と答えた。

井上はこれを聞いて教祖が信仰の真髓を一言で道破したことに深い感銘を受けた。こうして井上は、教祖の力の偉大さを覚り、また、人格に打たれ、法政大学に籍を置きながら、昭和五年（一九三〇年）の秋ごろから側近で神務に励む生活にはいつたのである。そのころのことであろうか、教祖の手元不如意（金銭に不自由すること）の時、井上は、実家から送られてくる学費などの仕送りを、そっくり教祖に差し出すということもよくあったという。

井上はきわめて個性的な人柄であった。教祖に呼ばれ、あわてて、くわえていた煙草を袂に入れて駆けつけたので、教祖の前で袂が燃えだしたという話や、教祖に庭木の「枝下ろし」を言いつかり、自分の乗っている枝を切り落としかけたので、下で指図していた教祖の方がびっくりしたという話など、奇行談が数多く伝えられている。

しかし、井上の記憶力の良さや、またその能筆ぶり、文字を良く知っていること、なかなかの美文家であることなど、その文学的才能には卓越したものがあつた。書画の揮毫、論文の口述、機関紙や雑誌の発行と、多方面にわたる文化活動を進めた教祖には欠くことのできない大切な側近であつた。とくに、その美声はすばらしく、讃歌を先達する声は聞く人の心に響き、また、笑い冠句の朗詠はまさに絶妙といふべきものがあつた。

井上は教祖昇天後、昭和三七年（一九六二年）一〇月、五三歳をもつて帰幽した。

菜食について（二）

（株）瑞雲 代表取締役 堀口照正

先月は菜食の大切さについて明主様の教えから、「日本人の体には菜食が理想であること」、「病気の時は菜食に徹するのが良いということ」、「現代生活においては、魚・鳥・肉などは楽しみとしてバランス良く食すのが良いということ」という三つのポイントを学びました。

「是から説く栄養食は、日本人を基礎としたものである。今、人間の食物を二大別すると、植物性食餌と動物性食餌とである。今、此植物性食餌から説いてみる。

肉体の血になり、肉になる栄養素は、植物性食餌即ち穀類野菜であって、単に、肉体を養う^だだけの意味から言えば、植物性食餌のみで充分なのである。然し、人間は、社会生活の必要上、唯生^{それら}きる以外、智慧、元氣、発展向上心、凡ゆる欲望、夫等^{それら}がなくてはならない。そういう意志^そ念を湧出するに力あるのが、動物性食餌の役目である。故に、都会生活者は、その必要から動物性食餌を多く摂る^と事になり、反対に、農村人は、植物性食餌を多く摂るといふ事は、実に自然によく出来ているのである。

であるから一度病気に侵された時は、野菜食を多く摂るのが合理的である。病気に罹^{かえ}れば、智慧を揮い、元氣や欲望の必要がないので、反^{かえ}って、病気の為の熱や苦痛の為、肉体的要素が衰弱消耗するを以て、それを補給する必要上野菜食に限ると言ってもいいのである」

（「日本医術講義録 第一篇」昭和10年）

み教えでは、肉体を養うだけであれば穀類や野菜などの植物性の食事で十分であるとした上で、動物性食事の役割を明確にされています。それは、社会生活に必要な「智慧、元氣、発展向上心、あらゆる欲望」といった意志^そ念を生み出すためには、動物性の食事が必要であるということす。

昭和一〇年当時、これは「都会生活者の必要性」として記されましたが、現代は当時よりもさらに農村比率が下がり、国民の多くが都会的な生活を送っています。そのため、当時以上に智慧や元氣、発展向上心が求められているのは確かです。とはいえ、当時の社会情勢や食事情における食肉の量・価格と比べると、現代の私たちは肉を食べ過ぎているようにも思えます。今やアルバイトの時給の半分ほどの金額で、ハンバーガーや牛丼などの牛肉が手軽に食べられるファストフード店が全国にあり、魚よりも肉の方が安く手に入る時代です。皆さまはいかがでしょうか。それぞれの生活習慣や仕事の性質を振り

返り、「肉を食べ過ぎていないか」「野菜や穀物とのバランスはどうか」など、み教えに照らし合わせてゆつくりと考えてみてはいかがでしょうか。

そして、み教えには、「一度病気に侵された時は、野菜食を多く摂るのが合理的である」ともあります。私自身、病気の時に菜食に徹することの大切さを学んだ経験があります。

自然食のご用を始めた三〇年ほど前のことです。先輩の布教師から、「浄化で食事ができない時は、自然農法のお米の重湯（おかゆの上澄み）を少しずつ食べさせるのが良い。明主様もお腹を壊された時は薄い重湯を召し上がっていた」と教わりました。その後、二歳の娘が高熱を出し、二日ほど飲み食いができない浄化をいただきました。そこで早速、重湯を用意しました。一緒にいた母は娘が好きな食べ物や飲み物を用意してくれていました。二日目に娘が自ら口にしたのは重湯でした。重湯を少し含むと、まるでスイッチが入ったように生気を取り戻し、水を飲み、他の物も食べ始め、それから一気に元気になっていったのです。身体が衰えている時には、菜食の中でもその原点というべき「重湯」が最も適しているのだと学んだ、大切な経験でした。

明主様の食事観を実践する上で大切なのは、栄養の本

質を理解することだと思います。近代栄養学がいう栄養が「体の栄養」であるのに対し、明主様が唱えられている栄養とは「霊の栄養」であり、本質的にはこちらが「主」となります。この霊体両面の栄養を正しく理解し、実践していくことが大切なのだと感じています。



瑞雲郷の紫陽花と水晶殿

【お知らせ】

■聖地祭典前後のご奉仕者募集

聖地に於ける祭典では、その前後に、信徒によるご奉仕を募集しています。時間は、参加者のご都合に合わせてます。事務局までお問い合わせください。

■MOA美術館アートボランティア募集

お客様サポート、館内安全業務、他。18歳以上70歳未満。健康で長期ご奉仕のできる方。(一日型、半日型)ご都合の良い日にご奉仕いただけます。令和九年一月一日からの一年登録です。

■機関誌「道」ホームページ掲載

世界救世教ホームページに、当会機関誌「道」を掲載しています。
検索方法：世界救世教 <https://sekaikyuseikyoku.or.jp>

■祖霊祭祀

当会では、東方之光の箱根紫微宮、いづのめ教団の熱海救世神殿祖霊舎に、お申込みいただいたすべての祖霊さまをお祀りしています。(不明な点があればお尋ねください。)

■教費・ご献金・慰霊祭・その他のお届け、各種申し込み

毎月20日が、受付べ切となります。(厳守)

個人、またはグループでまとめてお申込みいただいても結構です。個人の場合は、送金の明細(教費・各種献金・お玉串・年祭慰

霊祭・各種申込み)を、お知らせください。

メールやファックス、または事務局への電話申込みも承ります。

■緊急のご祈願

緊急事態、またはご浄化などに際し、聖地のご神前にてご祈願をさせていただきます。当会事務局までご連絡ください。

■ご相談、入信、ご下付、「おひかり」のお浄め、その他

信仰活動上のご相談は、事務局までご連絡ください。

■送金口座

① ゆうちょ銀行↓ゆうちょ銀行

(記号) 12320 (番号) 58911131 セイチチヨツケツノカイ

② 他銀行↓ゆうちょ銀行

(店名) 二三八 (店番) 238

(普通) 口座番号5891113 セイチチヨツケツノカイ

③ スルガ銀行 熱海駅支店601

(普通) 口座 3618722

世界救世教 明主様と聖地に直結する会 代表 立石博

※感謝献金・教費・玉串料・慰霊祭の申込みなど、送金につきましては、ご連絡いただければ、ご案内させていただきます。



七夕

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1 階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 98 2026年7月15日発行

世界救世教

明主様と聖地に直結する会

